

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19530553

研究課題名（和文） 犯罪不安に関する認知・感情プロセスのモデル化とその応用

研究課題名（英文） Modeling the cognitive-affective processes for fear of crime and its applications

研究代表者

上市 秀雄 (UEICHI HIDEO)

筑波大学・大学院システム情報工学研究科・講師

研究者番号：20334534

研究代表者の専門分野：心理学

科研費の分科・細目：社会心理学

キーワード：意思決定、感情、対処、適応的行動、社会問題

1. 研究計画の概要

本研究の目的は、犯罪というものを、(1)一般市民側から犯罪に対してどのように感じるのかという方向（被害者側からのアプローチ）からだけでなく、(2)もしかすると一般市民も罪を犯す側になるかもしれないという方向（加害者側からのアプローチ）からも、犯罪不安に関する認知・感情プロセスを、調査・実験結果に基づき理論モデルを構築し、そしてその理論モデルをコンピューターシミュレーションによって検証することである。

2. 研究の進捗状況

本研究の成果は、おおむね以下のとおりである。

(1) 被害者側からのアプローチ

①我々が普段あうような犯罪被害を明らかにした上で、周りの対応が精神的な被害感情（自己非難や恐怖心・不安感）低減に及ぼす影響、および自分の対処が被害感情低減に及ぼす影響について検討した。その結果、男性は最もショックだったものや被害の大きかった犯罪被害として、金銭的被害、女性は身体的被害が高いことがわかった。さらに犯罪被害の感情を和らげるためには、周りの人の対応は、被害者の話に耳を傾け、罪責感を軽減させる言葉をかけるなどが重要であること、自分自身の対処としては、人に話をして自分の気持ちの整理をすること、被害回避のために何かしようとする必要があることがわかった。

②防犯意識を高めるためには、類推、つまり

自分の犯罪被害体験や他人の犯罪被害経験がどのように影響するのかについて、実験をおこなった。その結果、直接体験である自分の犯罪被害経験を思い出すよりも、間接体験である他人の体験談を想起するほうが、防犯意識が高まることが明らかとなった。

(2) 加害者側からのアプローチ

①何らかの不適切な行動をする側が、その行動に対してどのように感じているのかを明らかにするために、自分の人生において最も強く感じている罪悪感について調査した。その結果、大きく分けると、法律や規則違反と対人関係に分けられることがわかった。

②不適切な行動をする側が、その行動を適切な行動に変わるためには、どのようなことが必要かについて検討するために、調査実験をおこなった。その結果、自分の行動に対して自分自身の行った行動に対してよい意味で気にすること、つまり「気がかり」が重要であることがわかった。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展していると考えられる。（理由）当初計画していた部分のうち、実験や調査にかかわる部分については、おおむね達成できたからである。

4. 今後の研究の推進方策

今後は実験、調査によって、今まで得られた研究結果をより進展させつつ、それら知見に基づきシミュレーションによって検証する予定である。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計3件)

- ① 上市秀雄、星野香那 犯罪被害者の被害感情低減のための方法：大学生の被害内容と精神的被害に対する対応と対処. 日本心理学会第72回大会発表論文集, 466, 2008年9月19日. 北海道大学
- ② 栗山直子、寺井あすか、織田弥生、楠見孝、上市秀雄 犯罪被害経験の想起が防犯意識の変化に及ぼす影響：直接的被害体験と間接的被害体験の比較. 日本心理学会第72回大会発表論文集, 465, 2008年9月20日. 北海道大学
- ③ Ueichi, H., & Oishi, M. The effects of coping methods on guilt over a period of time. International Journal of Psychology Abstracts of the 29th International Congress of Psychology, 43(3/4), 340. 2008年7月. Berlin.